



Title	日本語繁辞文と格表示無し分裂文
Author(s)	中野, 晃希
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88330
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語繫辞文と格標示無し分裂文

中野晃希

1. はじめに

本稿では、日本語繫辞文の統語分析を行う。以下が繫辞文である。

(1) 太郎はばかだ

ここで言う繫辞とは、二つの句に後続している「だ」のことを指す。英語の繫辞文と異なり、日本語の繫辞に関する統語的研究は数少なく、その分類に関しても英語での分類を転用する形で分析が行われてきた。本稿でも同様に、Higgins (1979) によって提案された、以下の4種類の分類を用いる。

(2) a. Predicational (叙述)

太郎はばかだ

b. Specificational (指定)

県大会の敗因は、人材不足だ

c. Identificational (同定)

あの人は、私の友達の花子だ

d. Identity / Equative (同一性)

広島焼きはお好み焼きだ

各分類の性質に関しては2節で詳しく触れるが、これら繫辞文の中でも、その統語的性質がそれぞれ異なることが観察されており、岸本 (2012) ではそれら差異が統語構造の違いから生じるものであると提案している。具体的には、指定文と同定文に関しては、分裂文の構造を持つというものである。しかし、日本語の分裂文には、振る舞いの異なる幾つかのタイプの分裂文が存在する。特に、分裂文の中でも移動を伴うか伴わないかという点で振る舞いが異なる、格標示あり分裂文 (3a) と、格標示無し分裂文 (3b) が存在すると以下のように報告されている。

(3) a. 太郎が食べたのはリンゴを3つだ

b. 太郎が食べたのはリンゴ3つだ

文の焦点として解釈される目的語「リンゴ」に対格「を」が付与されているか否かによって、その統語的性質が異なることが報告されている。本稿では、岸本 (2012) の提案を採用した上で、振る舞いの異なる幾つかのタイプがある日本語の分裂文の、どのタイプのものが繫辞文と同じ構造であるのかについて分析し、岸本 (2012) が分裂文であると分析した指定文と同定文が、格標示無し分裂文 (3b) であることを主張する。

2. 繫辞文の分類

繫辞文は、Higgins (1979) によってその意味解釈や句の種類から 4 種類に分類されている。以下がその分類である。

(4) Predicational (叙述)

- a. The hat is big b. The hat I bought for John is big
- c. What I bought for John is big (Mikkelsen 2011)

(5) Specificational (指定)

- a. The director of *Anatomy of a Murder* is Otto Preminger
- b. The only director I met was Otto Preminger
- c. Who I met was Otto Preminger (Mikkelsen 2011)

(6) Identificational (同定)

- a. That (woman) is Sylvia b. That (stuff) is DDT (Mikkelsen 2011)

(7) Equative (同一性)

- a. Sylvia Obernauer is HER b. Cicero is Tully (Mikkelsen 2011)

以下からこれら 4 種類の分類を概観する。

まず、叙述文では、指示的な名詞句 (*the hat*) に続き、その名詞句の性質の叙述を行う形容詞句が用いられる。本稿では、繫辞文の左に現れる主語要素を A、右に現れる述語要素を B と呼ぶ (A は B だ)。叙述文の主語では、常に指示的 (referential) な要素が現れると、以下の付加疑問文 (tag-question) を用いたテストにより観察されている。ここでは、付加疑問文が意味解釈の段階で常にその文の主語を参照すると仮定する。

- (8) a. The guest of honor was happy, wasn't she/he/*it?
- b. The guest of honor spoke after dinner, didn't she/he/*it? (Mikkelsen 2011)

ここで、主語である *The guest of honor* は常に性素性の一致を見せる代名詞とのみ共起可能であり、主語が指示性を持つと考えられる。次に、述語部分では、主語 A の性質を叙述する要素であれば、名詞句、形容詞句、前置詞句のどれであっても容認されると報告されている。

- (9) a. Sylvia is the architect on that project.
- b. Sylvia is happy.
- c. Sylvia is from Seattle. (Mikkelsen 2011)

以上の述語は、全て主語 *Sylvia* の性質、属性を叙述している。また、述語は動詞句削除によって省略が可能であることから、B が述語として振る舞うと考えられる。

(10) a. *Sylvia is the architect on that project, but [I wish she wasn't].*

b. *I wish she wasn't the architect on that project.* (Mikkelsen 2011)

先行詞に続き、(10a) では文が繫辞で終わっているにも関わらず (10b) の解釈が可能であることから、B (*the architect on that project*) が省略されていると分析される。

指定文では、A に足りない要素があり、それを B が補うことで、指定している。

(11) a. *What John is is silly.*

b. *John is an X. the X such that x is silly.* (Mikkelsen 2011)

指定文の主語は (11a) における *what John is* が相当するが、そこでは「ジョンが X である」ことのみを意味しており、B でその X を指定する。ここで、付加疑問文のテストを指定文にも適用すると、先ほどの叙述文とは異なり主語に指示性が見られないことが観察できる。

(12) *The director of Anatomy of a Murder is Otto Preminger, isn't it?* (Mikkelsen 2011)

叙述文では容認されなかった、性素性の一致を見せない *it* が、(12) の指定文では容認可能である。指定文に指示性が見られないことは、主語 A がそれのみでは完結した意味にならないこととも合致する。

次に、同定文では主語に、特に指示詞 (*demonstrative*) を伴った名詞句が用いられ、その指示対象が B と同一であることを主張する。主語は指示詞を伴っていることから分かる通り、指示性を有する。

(13) a. *That (man) is Joe*

b. *That (woman) is the mayor of Cambridge*

c. *That (place) is Boston*

d. *That's a teacher who has been helping me with my polynomials.*

e. *It is Joe Smith* (Mikkelsen 2011)

最後に、同一性文では、名詞句として現れる主語 A と、同じく名詞句として現れる B が同一の指示を持つことを主張する。同一性文は、生起可能な文脈がかなり限られることから、分類に含まれないことも多いが、埋め込み節内に生起した場合であれば容認しやすくなる。

(14) a. Sylvia is her.

b. John thinks that Sylvia Obernauer is her.

(Mikkelsen 2011)

以上の 4 種類をまとめると、指示性 (referential) に関して以下の分布が観察される。

	NP1	copula	NP2
Predicational	Referential		Non-referential
Specificational	Non-referential		Referential
Identificational	Referential		Referential
Equative	Referential		Referential

ここまで、“referentiality” について定義をせずに言及してきたが、研究によって様々な定義が提案されている。例えば、意味の観点からは、名詞のタイプ (cf. Partee 1987) によって、referential はタイプ e、non-referential はタイプ <e, t> に対応すると提案されている。次の節で概観する岸本 (2012) では、またこれとは異なる定義がなされている。本稿では、二言語間に共通の分類として上記の表を用いることから、単にその性質に基づいた分類としてのみ扱い、性質の詳細については触れない。そこで、その意味解釈が変項を要する要素を “non-referential”、そうでないものを “referential” と定義する。具体的には、Predicational では、「太郎はばかだ」と言った時、B 位置には必ず A 位置の要素の性質を説明する語が現れる。この時、B 位置の要素は「there is some x, and x is stupid」を意味し、「stupid」という性質を有する要素である「太郎」が変項 x の位置で解釈される。また、Specificational では、A 位置の要素に「敗因」「原因」といった、意味が一部欠けた語が用いられる。そして、B 位置の要素がその欠けた変項部分を指定する。例えば、「県大会の敗因は、人材不足だ」といった時、A 位置は「there is some x, and x is the reason why we lose」と解釈される。反対に、Identificational や、Equative では、「A=B」という一対一の関係が形成される為、それぞれの要素に欠けた意味 (変項) が存在することはできず、non-referential な要素は存在しない。

3. 日本語の繫辞文

本節では、2 節の繫辞の分類をもとに日本語の繫辞文と、その統語的振る舞いに関して分析した岸本 (2012) を概観する。Higgins (1979) の分類に基づいた日本語繫辞文を以下に再掲した。

(15) a. Predicational (叙述)

太郎はばかだ

b. Specificational (指定)

県大会の敗因は、人材不足だ

c. Identificational (同定)

あの人は、私の友達の花子だ

d. Identity / Equative (同一性)

広島焼きはお好み焼きだ

日本語の繫辞文は、英語と同様、状態や性質を意味する為、時を表す要素とは共起しないことが報告されている。

(16) a. *彼のお兄さんは、明日まで潔癖症だ

b. *今回の火事の原因は、まだタバコの火の不始末だ

c. *あそこに立っている人は、今から先ほど話題になったジョンだ

d. *宵の明星はまだ明けの明星だ

(岸本 2012)

以上は、上からそれぞれ叙述文、指定文、同定文、同一性文であるが、全て時を表す表現と共起することはできない。しかし、日本語繫辞文には共起する場合が以下のように観察されている。

(17) a. 私のお父さんは海外出張だ

b. 私のお父さんは明日から来月まで海外出張だ

c. 私のお父さんは海外出張をする

(岸本 2012)

(17b) では、海外出張の期間を表す要素が共起可能になっている。しかし、本稿ではこれをうなぎ文の一種であり、(17c) の形から派生されているものとする。うなぎ文とは奥津(1976) による (18a) の表現のことである。

(18) a. 太郎がうなぎだ

b. 太郎がうなぎを注文する

うなぎ文はそれぞれ (17c) や (18b) のように通常の動詞を省略した形であると考えられている為、繫辞文ではないとして本稿では扱わない。

まず、日本語繫辞文の性質である、A と B の交替について見ていく。繫辞文では、叙述文以外に関しては、句の交替が可能であることが観察されている。

(19) Predicational (叙述)

a. 彼のお兄さんは、かなりの潔癖症だ

b. *かなりの潔癖性が、彼のお兄さんだ

(岸本 2012)

(20) Specificational (指定)

- a. 今回の火事の原因は、タバコの火の不始末だ
- b. タバコの火の不始末が、火事の原因だ (岸本 2012)

(21) Identificational (同定)

- a. あそこに立っている人は、先ほど話題になったジョンだ
- b. 先ほど話題になったジョンが、あそこに立っている人だ (岸本 2012)

(22) Identity (Equative: 同一性)

- a. 宵の明星は明けの明星だ b. 明けの明星が宵の明星だ (岸本 2012)

岸本 (2012) はこの性質が、繫辞文の中に分裂文と同じ統語構造を持つものがあることによって説明できると分析している。分裂文とは、(23) のように前提を表す句と焦点を表す句が繫辞の前に出てくる文を指す。まず、岸本 (2012) では、分裂文に見られる性質である、WH 句が前提部に現れることができないことをテストとして用いた。

(23) [前提 太郎が食べたのは] [焦点 リンゴを3つ] だ

- (24) a. ジョンは、誰に本をあげましたか
- b. 誰がジョンに本をあげましたか
 - c. *その時誰にあげたのはこの本ですか
 - d. その時ジョンにあげたのはどんな本ですか (岸本 2012)

まず、通常の平叙文であれば (24a, b) のように、主語であっても目的語であっても疑問文として WH 句を使用できる。しかし、分裂文では (24d) のように焦点箇所を疑問詞で尋ねることができるのに対し、(24c) のように前提部分に WH 句が生起すると容認不可能になる。岸本 (2012) はこの分裂文と同じ性質が、一部の繫辞文にも観察されると報告している。

(25) Predicational

- a. 山田さんは{どれくらいの/どの程度の}潔癖性ですか
- b. 誰が潔癖性ですか

(26) Specificational

- a. 今回の火事の原因はなんですか
- b. #いつの火事の原因が火の不始末ですか
- c. 火の不始末はいつの火事の原因ですか
- d. 何が今回の火事の原因ですか

(27) Identificational

- a. 向こうにいるあの人は、どこで話題になっていた人ですか
- b. #向こうにいるどの人が、先ほど話題になっていたジョンですか

- c. 先ほど話題になっていたジョンは、向こうにいるどの人ですか
- d. #どこで話題になっていた人が、向こうにいるあの人ですか

(28) Identity

- a. ジキル博士は誰ですか b. 誰がハイド氏ですか
 - c. ハイド氏は誰ですか d. 誰がジキル博士ですか
- (岸本 2012)

叙述文は交替できない為、2通りのみであるが、(25)のようにAとBのどちらに疑問詞が現れても問題なく解釈可能である。同一性文でも(28)の形でどこに疑問詞が出てこようとも解釈できる。対して、指定文では、(26b)のように指示性を持たない「火事の原因」が主語にある場合、疑問詞が生起していても聞き返しの解釈のみが可能になっており、通常の疑問文である(26c)と同じ解釈はできない。また、同定文では指示詞であっても述語部であっても、(27b, d)のように、主語Aの位置に疑問詞が出てくるとWH疑問文の解釈は出来ず、聞き返しのみが可能となっている。この事実から、岸本(2012)では、指定文の一部と、同定文では、以下のように分裂文と同様の統語構造となっていると提案している。ここで、どちらを基底構造とするかは分析によって異なるが、岸本(2012)では以下の順序で交替がかかることによって、分裂文化を伴って派生していると提案している。

(29) a. 火の不始末が今回の火事の原因だ →

[DP [CP Op_i [t_i 今回の火事の原因 COP]]は] [DP 火の不始末]_i だ

b. 話題になったジョンがあそこに立っている人だ →

[DP [CP Op_i [あそこに立っている人 t_i COP]]は] [DP 話題になったジョン]_i だ

c. あそこに立っている人が話題になったジョンだ →

[DP [CP Op_i [t_i 話題になったジョン COP]]は] [DP あそこに立っている人]_i だ

それぞれ、主語Aの内部に繫辞と操作詞が生起しており、繫辞は縮約され、操作詞はCPへ移動していくことでBと同一指示を得ている。岸本(2012)は、さらにHiggins(1979)とは別に、具体的な事物を指さず、属性や特性を叙述する[+attr]という性質と、具体的な事物を指す[+ref]という名詞句の性質を仮定し、[+ref]でない要素をAの位置に置く交替はできない、つまり[+attr]の要素がAの位置で分裂文として派生する事はできないと提案している。岸本(2012)では叙述文と指定文の名詞タイプをそれぞれ以下のように仮定している為、分裂文化を伴う交替が叙述文ではできないことが捉えられる。また、この[+ref]の性質は、“referentiality”とは全く異なる、名詞句の性質を指す標示として新たに提案している。

(30) a. 叙述文

A[+ref]は B[+attr]だ → 交替 (分裂文化) → *B[+attr]が A[+ref]だ

b. 指定文

A[+ref]が B[+ref]だ → 交替 (分裂文化) → B[+ref]は A[+ref]だ

4. 繫辞文と分裂文

分裂文には、格助詞を伴ったものと伴わないものの 2 種類が存在すると報告されている (Fukaya and Hoji 1999)。以下のように、焦点位置に生起する名詞句は格助詞が任意に付与可能である。

(31) a. 直也がマリが食べたと言ったのはリンゴを三つだ

b. 直也がマリが食べたと言ったのはリンゴ三つだ (Hiraiwa and Ishihara 2012)

この 2 種類の分裂文には、統語的に異なる性質が観察されており、格標識を伴っている物のみに関しては、(32a) のように、その範疇からの外への移動を許さない島の制約が見られる。対して、(32b) のように格標識のない分裂文に関してはその違反が見られないことから、格標識のある分裂文のみにその中での移動が生じていると考えられる。

(32) a. *直也が_{島 t_i}書いた人を]批判したのはこの論文をだ

b. 直也が_{島 t_i}書いた人を]批判したのはこの論文だ (Hiraiwa and Ishihara 2012)

岸本 (2012) の分析では格標識を持った分裂文を仮定していた為、操作詞の移動が生じていたが、本稿ではその移動を伴わないタイプの分裂文が、繫辞で観察される分裂文であると提案する。以下から、分裂文に見られる性質を概観し、その性質が繫辞文にも見られるのかを確かめる。まず、分裂文では主格が焦点位置に生起することができないと報告されている。つまり、格標識なしの分裂文しか許されない。対して、(33b, c) にあげた各タイプの繫辞文も同様に主格を許さないことが観察できる。

(33) a. 花子にリンゴをあげたのは太郎(*が)だ

b. 火事の原因は火の不始末(*が)だ

c. あそこに立っている人は、先ほど話題になったジョン(*が)だ

次に、名詞句と代用形「の」の置換は、(34a) のように格標識なしの分裂文でのみ許されるとされている。対して、(34b, c) の繫辞文でも同様に主語 A の名詞句を代用形「の」で置換することができる。

- (34) a. 太郎が食べた{の/*もの/*果物}はリンゴを三つだ
 b. 今回の火事{の/の原因}は火の不始末だ
 c. あそこに立っている{の/人}は、先ほど話題になったジョンだ

最後に、埋め込み節内の分裂文からの、抜き出しを見る。埋め込み節内の分裂文の前提部からの抜き出しは、格標識の無い分裂文でのみ許される。つまり、分裂文の前提部からの上位節へのさらなる抜き出しは通常許されない。しかし、繫辞文では (35b) のように、繫辞文からの上位節への抜き出しが可能となっており、岸本 (2012) のように繫辞文でも操作詞の移動が生じると考えると捉える事ができない。

- (35) a. 太郎が先生に[花子が盗んだのは職員室からだ]と密告したのはその答案(*)だ
 b. ?警察が必死に[Op[_{t1} Cop]放火かどうか]調べているのは火事の原因₁だ

そこで、本稿では、指定文と同定文には、移動を伴わない分裂文と同じ統語構造があると提案する。WH 句が主語位置に生起できないことから、移動を伴わない点を除き、その前提と焦点を持つ情報構造は同一であると考えられる。

- (36) a. [前提 今回の火事の原因 ~~COP~~は] [焦点 火の不始末]だ
 b. [前提 あそこに立っている人 ~~COP~~は] [焦点 話題になったジョン]だ
 c. [前提 話題になったジョン ~~COP~~は] [焦点 あそこに立っている人]だ

そして、A と B の交替現象に関しては、岸本 (2012) のように名詞句の性質[+ref]を新たに仮定せずとも、2 節で扱った Higgins (1979) による分類に基づいての説明が可能となる。まず、(37) のように、変項を必要とする non-referential な要素が主語位置で解釈される為には、分裂文である必要があると考えられる。このことは、変項を必要とする要素が、その変項を指定する要素よりも、構造上低い位置に生起していなければならないことから説明できる。

- (37) a. *かなりの潔癖性が[-ref]、彼のお兄さんだ[+ref]
 b. 今回の火事の原因は[-ref]、火の不始末だ[+ref]
 (38) a. (失敗の)全ての原因は、誰かのミスだ some>all, *all>some (分裂文—指定)
 b. 誰かのミスが、(失敗の)全ての原因だ some>all, *all>some (繫辞文—指定)
 c. 誰かの兄は、全員の愛人だ some>all, *all>some (繫辞文—叙述)
 d. *愛人が、彼のお兄さんだ (cf. 彼のお兄さんは、愛人だ) (繫辞文—叙述)

(38a) での量化子の作用域が示すように、分裂文では常に B 位置の要素が構造上高い解釈をとる。逆に、(38b, c) のように繫辞文では主語である A 位置の要素が構造上高い位置をとる。

る。つまり、A 位置に変項を必要とする要素[-ref]が生起した場合、B 位置が構造上高くなる分裂文でなければ、その変項を指定することは出来なくなり、(37a) や、(38d) のように非文となってしまう。叙述文や、変形前の指定文のように[-ref]の要素が B 位置に来る際は、繫辞文なので、A 位置の[+ref]である要素がより高い主語位置に生起することで容認可能となる。A 位置に[-ref]である要素が派生した際には、指定文は変形操作で分裂文となるので、B 位置の[+ref]の要素がより高い位置に派生できるが、叙述文は分裂文にはなれず、非文となってしまう。

本稿では、格標示の有無によって異なる分裂文の性質を用い、分裂文と同じ構造や統語的性質を見せる繫辞文は、格標示なし分裂文であると分析した。また、その分析によって、叙述繫辞文でのみ不可能であった主述の交替現象が、Higgins (1979) 以降なされてきた繫辞の分類に従い、新たな仮定なしで説明できると主張した。

5. おわりに

本稿では、繫辞文の中で分裂文と同様の性質を見せるものが、分裂文の中でも、格標識と移動を伴わないタイプのものであることを議論した。分裂文の構造が交替や WH 句の可否を決めていると考えられることから、繫辞文には操作詞の移動は必要ないと考えられる。今後の研究では、なぜ一部の要素でのみ分裂文の性質が見られるのかが問題となる。

参考文献

- Fukaya, Teruhiko and Hajime Hoji (1999) Stripping and sluicing in Japanese and some implications. In Sonya Bird, Andrew Carnie, Jason D. Haugen and Peter Norquest eds., *Proceedings of the 18th West Coast Conference on Formal Linguistics*. 145-158. Cascadilla Press, Somerville.
- Higgins, Roger Francis (1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*. New York: Garland.
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2012) Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and In-situ Focus in Japanese. *Syntax* 15.2. 142-180.
- 岸本秀樹 (2012) 「日本語コピュラ文の意味と構造」影山太郎 (編)『属性叙述の世界』くろしお出版. 39-67.
- Mikkelsen, Line (2011) Copular Clauses. In von Stechow, Henning and Portner eds., *Semantics* (HSK33.2). de Gruyter. 1805-1829.
- 奥津敬一郎 (1976) 『生成日本文法論—名詞句の構造—』大衆館書店.
- Partee, Barbara (1987) Noun phrase interpretation and type-shifting principles. In J. Groenendijk, D. de Jong and M. Stokhof eds., *Studies in Discourse Representation Theory and the Theory of Generalized Quantifiers*. 115-143.